

- 1 派遣期日 平成29年8月3日(木)
- 2 研修先 学校名(会場名) 筑波大学附属小学校
所在地 〒112-0012 東京都文京区大塚3-29-1
<http://www.elementary-s.tsukuba.ac.jp/>
- 3 研修内容 第19回全国国語授業研究大会
大会テーマ 国語授業における「深い学び」とは何か
ー新学習指導要領の目指すものー

(1) 公開授業参観

公開授業① 第4学年国語 (筑波大学附属小学校 青木 伸生先生)

○学習材 説明的文章「言葉と事実」(教育出版 5年)

○提案について

フレームリーディングで「深い学び」をつくるという提案趣旨の授業であった。新学習指導要領における読むことの指導事項内容の(1)は、内容の指導過程に沿って次のように構成されている。

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">・構造と内容の把握・精査・解釈・考えの形成・共有 <p>(学習指導要領解説より)</p> |
|---|

これは、フレームリーディングにおける3つのステップ、俯瞰(全体のフレームをつくる)ー焦点化ー統合と共通するところがある。新学習指導要領の「考えの形成」の前には、全体を見直す段階(リフレーミング)が必要である。その上で、読み手は自分の考えを形成する。大切なのは、詳しく読む前に、文章の全体像を把握する段階を位置付けることである。従来の授業では、文章を場面ごと、段落ごとに区切り、詳細な読解活動を展開することが多かったが、この授業では、全体のフレームをとらえることと、文章を詳細に読むことができるよう、バランスをとりながら授業を実践していた。

○授業参観

はじめに、文章に具体例がいくつ書かれているか数えた。となりの児童と交流する中で思考のずれが生じ、課題解決へとつながっていく様子が見られた。

次に、三つの事例のうち、いちばん大事な事例を選び、選んだ根拠について話し合った。ひとつを選ぶことに迷いがある児童は相談したり、友達の考えを聞いて交流したりしながら事例を選び、根拠を明らかにしていった。教師は、理由を板書で整理しながら児童どうしの考えをつなぎ、叙述を具体的にイメージしたり、共通した書き方に着目したりできるよう配慮していた。

最後に、事例は三つなければならないのかを考えた。児童は、フレームリーディングや、いちばんを選んで根拠を話す授業に慣れているため、いちばんを選ぶことにはこだわらずに、筆者が主張したい内容と事例のつながりについて考えていた。

○研究協議

学習課題や発問、説明文における事例の捉え方、板書構成などについて話し合いが行われた。「深い学び」のある授業を行うには、十分な教材分析や系統指導が重要であると感じた。

公開授業② 第5学年国語 (福岡県教育センター 立石 泰之先生)

○学習材 「だるまおくり」「大漁」「土と草」「ふしぎ」「星とたんぽぽ」(金子 みすゞ)

○提案について

「読むこと」における「深い学び」の条件を次のように設定した授業であった。

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">・テキスト(言葉、図表等)の関係付けをより緊密にする。・方略となる、よりよい読み方を見いだす。・読むことによって、ものの見方や考え方が変容する。 |
|--|

金子みすゞの詩の特徴や魅力についての話し合いを通して、児童は、詩の類似する点

を根拠にして魅力を分析する力や、金子みすゞと自分自身の世界の見方を比較し、自分の世界の見方について考えをまとめる力を身に付け、上記の「深い学び」が生じる授業が展開されていた。

○授業参観

はじめの課題提示では、金子みすゞの写真を見せながら「この人物が残した作品が愛される理由を考えよう」という課題を提示した。直截に児童の思いを問うのではなく、愛される理由を問うことで、児童が考えを表現しやすくなるよう工夫されていた。

次に、「だるまおくり」を全体で読み、詩の構造や内容について話し合った後、「大漁」を読み、二つの作品の魅力についてペアで話し合ってから発表した。学習材提示の順序を工夫したことにより、ペア交流では、「だるまおくり」での読みを活用しながら共通点を見だし、児童は、みすゞの作品が愛される理由について考えをもつことができていた。

最後に、配布されたプリントの3つの詩から詩を一つ選択し、自分の考えを書いた。まとめと振り返りの「型」を提示することで、児童が自分の考えをまとめ、学んだことを表現しやすくなっていた。

○研究協議

学習課題や学習材提示の工夫、ペア交流による活用場の設定などについての話し合いが行われた。物語文を感覚のみでなく叙述から考えて読むことの大切さや、児童の見方や考え方が変容する「深い学び」について考えさせられた。授業の中で児童に何を考えさせ、何を学ばせ、どんな力を付けて活用できるようにするのかをしっかりと考えて、手立てを講じることが重要であると感じた。

(2) ワークショップ

テーマ：「深い学び」へと導く学習課題（筑波大附属小学校 青山 由紀先生）

学習課題を「まとめ(答え)」との対応で整理すると、次の四つに分けられる。

- | |
|---|
| ①正解限定型 課題に対して正答が限定されている課題 |
| ②複数正答型 課題に対して正答が複数ある課題 |
| ③拡散型 それぞれが考えをもち、ほとんどが認められるため、正答が拡散する課題 |
| ④手立て型 学習のねらいを学習課題とするのではなく、そこへ導く手立てとなるような課題。 |

この中で、「深い学び」につながるのに有効と考えられるのは、②複数正答型の課題と④手立て型の課題である。

○複数正答型の課題例 「白いぼうし」(あまんきみこ)

読者が「女の子はちょうだ」と思われるしかけをみつけよう

児童は、ちょうど女の子の出現などの出来事、会話文、色、香りなど、複数の観点でつじつまが合うように書かれている「しかけ」をみつける。さらに、交流することによって、自分一人の考え方から多角的な読みへと変化する。

○手立て型の課題例 「ごんぎつね」(新美南吉)

つぐないは、いくつあるだろうか

ここで問うのは「つぐない」という言葉の数ではない。児童は「つぐない」という観点で文章と対話し、やがて意見が「一つ」から「七つ以上」と分かされると、交流したがる。この課題は〈つかみの課題〉である。数を問われると考えが明確になる。また、その理由を突き詰めて考えざるを得ない。〈つかみの課題〉を解決する過程で、登場人物や人物同士の関係性の変容から山場の検討が課題となり、〈本質的な課題〉へとつながっていく。

4 感想

今回の研修を通して、新学習指導要領のキーワードとなる「主体的・対話的で深い学び」をどのように具現化していくのか考えることができた。公開授業やワークショップでの課題例を中心に、発問や板書構成、言語活動例など、多くの提案があり、大変参考になった。児童の実態をよく把握した上で教材研究を重ね、授業をつくっていくことの大切さを感じた。児童がそれまでに獲得した力を使って読み、さらに新たな力を身に付けて読むことができるよう、六年間の系統性を意識し、どのような授業をすべきか考えていきたい。この研修で学んだことを生かし、「深い学び」の実現を目指して授業研究・改善に励んでいきたい。